今週の
倫理

2025. 7. 12〜7. 18

7月のテーマ　｜　人・物を生かす

1446号

「士は己を知る人の為に死す」

この言葉は『万人幸福の栞』第十五条の本文中に引用されている言葉であり、倫理法人会の会員にとっては馴染みのある言葉ではないでしょうか。

元々は、前漢の歴史家である司馬遷によってまとめられた中国の歴史書『史記―刺客列伝』の中に見える言葉です。様々な訳し方がありますが、概ね「立派な人間は、自分の真価を知って待遇してくれる人のためなら、命をなげうって尽くすものだ」という意味になります。

中国の春秋時代末期、晋の智伯という貴族が内部での勢力争いに敗れ滅ぼされてしまいます。その智伯に重用されていた予譲という家臣が逃亡のさなかで「士は己を知る人の為に死す」との思いに至り、自分を優遇してくれた智伯のために、命を賭けて復讐することを誓ったという紀元前四五〇年頃の実話が基になっています。

滅ぼされた主君の為に家臣が復讐を誓うという構図から、目下の者が上位者に対して持つ「忠誠心」の手本のように扱われる場合が多いのですが、それは目下の者の捉え方であって、企業を牽引する経営者がこの言葉を使って部下に「忠誠心」を求めるのは大きな間違いです。

大事なのは「知る」の部分をどう読むかで、『万人幸福の栞』では「知るとは信ずること」とあり、続けて「心の底から信じてくれる人には、うそをつくことが出来ぬ。信ずる人をごまかすことは出来ぬ」とあります。「うそをつかない、ごまかさない」部下だから「信じる」のではなく、「信じる」という上司の態度が先になっているところがポイントで「信じる」からこそ部下が「うそをつかない、ごまかさない」と読むのが経営者として求められる姿なのです。

人を生かすのは「信じる」という力

ところが今はどうでしょう。経営者は「社員が真面目に働いていないのでは？」と管理体制を強化し、社員は「働きが正当に評価されていないのでは？」と反発する気持ちを持っている。お互いに「疑う」ことが前提となってしまっているのが現実と言えるでしょう。

もちろん会社を良くするためには、関わる全ての人がお互いに「知る」＝「信じる」ことができる関係性になることが望ましいでしょう。しかし、会社は経営者が始めたものであり、始めた側の責務として、何事もまずは経営者が範を示さなければなりません。であるならば「信じる」ことも経営者が社員を「信じる」ことが先であって、社員に「忠誠心」を強要するのは逆さまであると言えるのです。

前述の『万人幸福の栞』の続く段落には「人の世の交りの本」は「信ずる」こととあります。社員一人ひとりが生き生きと働き、いざという時に最大限の能力を発揮してもらえるような、人が生かされている会社を作る根本の力は「信じる」ことです。

強固な信頼関係を基盤とした強靭な組織力を求めて、まずは経営者自身が「信じる」力の醸成に取り組んでまいりましょう。

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局